

アクティブ・ラーニング Q&A

第四回

授業の中で、
教師の役割は変化しますか。

生徒の主体的な活動を支援しながら、要所で適切な指導をすることが大切です。

アクティブ・ラーニングと対照的な授業としてイメージされるのは、教師による講義形式の授業でしょう。このような授業の中では、教師は教えるべき内容を深く理解し、それをわかりやすく伝えることが役割になります。難しい内容を理解させるために、詳しい説明資料やワークシートを作ったり、スモールステップを設けて段階的に考えさせたりするような工夫をします。これに対してアクティブ・ラーニングを取り入れた授業における教師は、生徒自身

学習指導要領改訂に向けて関心が高まるアクティブ・ラーニング。現場の先生方から寄せられるさまざまな疑問や悩みに、富山哲也先生がご回答くださいます。

が課題の解決のために必要な情報を集めて自分の考えをもち、交流を通して考えを深め表現することができるよう、支援していくことになります。教える役割から、生徒自身の「できる、わかる」をリードする役割への変化といえるかもしれません。

例えば、聞き手を引き付けるスピーチの工夫について学習する場面を考えてみましょう。講義形式の授業では、「よいスピーチの10のポイント」などと内容を整理したプリントを配り、それに基づいて取り組ませるような展開が考えられます。いっぽう、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業では、小学校での学習経験を思い出しながらグループでスピーチ（リハーサル）を聞き合い、工夫点を整理して本番のスピーチに生かすといった展開が考えられます。後者の授業では、生徒に学習活動の見通しを

もたせることが重要です。また、スピーチのテーマの設定・意図的なグループ編成・タブレットPC等の機器の準備なども、教師の役割として大切です。こうした支援により、生徒の主体的な学習が促されます。

ここで注意したいのが、教師は単なる学習活動の「進行役」ではないという点です。生徒の主体性を尊重しつつ、要所で適切な指導をすることが重要な役割です。例えば、グループ学習の前に個人の考えをしっかりとまとめるようにする。

グループ学習が停滞していれば具体的な検討の視点を示す。
・複数のグループの意見を関連づける。
・考えをより深めることを促す発問をする。
・グループの発表の際には、適切な評価のコメントをする。
等の指導です。このような教師の関わりを

抜きに、「深い学び」は成立しません。

生徒のさまざまな学習の状況に対応するためには、講義形式の授業にも増して、丁寧な教材研究が必要であることは言うまでもありません。

全ての授業で実現しようとする、
時間が足りなくなりそうです。
どうすればよいでしょうか。

年間指導計画に単元として
位置づけるとともに、
日常的な学習の中でできること
を取り入れていきましょう。

私は、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業づくりの視点を、次の五つに整理しています（※）。



イラスト：田上千晶

①生徒が興味をもつ教材・題材と魅力的な導入

②課題解決的な学習、既習事項を活用する学習

③学習の見通し、本時の目標の明示

④自分の考えを発表・交流する機会

⑤「できた」「わかった」の実感、「できたこと」「わかったこと」の振り返り

これらの視点を取り入れて単元を構想すると、主体的・協働的な学習が展開されると思います。年間指導計画の中に、意図的に位置づけていきましょう。

授業時数を考える際に特に重要になるのが、⑤の視点です。この「振り返り」には、課題解決の過程の振り返りも含まれます。単元を通じてどのように課題を解決してきたか、その道筋を認識することです。これを繰り返すことで、生徒は学習の見通しをもったり、自分の考えを発表・交流したりすることが速やかにできるようになるでしょう。すなわち、アクティブ・ラーニングを繰り返す中で、それに要する時間は短くなっていくと考えられます。

とはいえ、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業は、講義形式の授業より時間

がかかることは否めません。ですから、常に①から⑤全ての視点を意識した単元構想をするのではなく、必要な視点を適宜取り入れた授業と組み合わせることに

するのではないのでしょうか。例えば、魅力的な導入を工夫するだけでも、授業は変わります。試みに、俳句の学習をする際に、

・外国の人が作った俳句を読んでみる。
・俳句と川柳の違いについて考えてみる。
・新聞等の「俳壇」の俳句を読んで、優秀句を選んでみる。

等の導入の工夫を試みてはどうでしょう。俳句という文化の広がりや創作のおもしろさを感じたり、読む人による捉え方の違いに気づいたりします。そのことが、後に続く学習のよい動機づけになると思います。

アクティブ・ラーニングの考え方は、日々の授業をより魅力的なものにすることにつながります。



富山哲也

十文字学園女子大学人間生活学部児童教育学科教授。東京都公立中学校教員。あきる野市教育委員会、多摩教育事務所、東京都教育庁指導部指導主事を経て、平成16年10月から文部科学省教科調査官（国語）、国立教育政策研究所教育課程調査官・学力調査官。平成20年版学習指導要領の作成、全国学力・学習状況調査の問題作成・分析等に携わる。平成27年4月から現職。第1期＜絵本専門士＞。